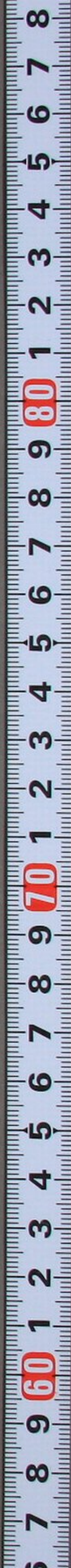


首書

源氏物語

卷之十  
五十  
源氏物語





五十四日錄

〇河才舟七此物語の巻々各相垂り手習はつちまへ或詞の字とて名つを或哥の心を以て早うせり  
 うと此巻と夢浮橋と題しつちまへ詞の字とて奇よとて古来の不審也凡夢浮橋と云詞是より  
 うとせらるる夢のまじり此浮橋とあり奇つとていふも或説云手習君董大将の父とありまじり  
 てうとせらるるよりていふもいふはうとせらるるといふ此巻は夢と云初五ヶ辰より又大将の哥は  
 浅薄也りの文とひとてあるをいふはうとせらるるといふはうとせらるるといふはうとせらるるといふは  
 大く此物語のまじり心とていふもいふはうとせらるるといふはうとせらるるといふはうとせらるる  
 一盛者必衰の趣とていふはうとせらるるといふはうとせらるるといふはうとせらるるといふは  
 諸法つとも夢のまじりといふはうとせらるるといふはうとせらるるといふはうとせらるるといふは  
 衆生本來成佛生死涅槃猶如昨夢善男子如昨夢故當知生死及与涅槃無起無滅無來無去  
 唯識論とて未得真覺常處夢中故佛說解生死長夜と有内外乃經書とて此夢とていふはうとせらるる  
 〇伊弉諾伊弉册尊天浮橋の上りて共為夫婦とて陰陽とてわ州國と生ぜ我國の元始也  
 鶺鴒巢鶺鴒の徳のゆかりとて此夫婦乃道とて以て周公の風とてのへり陰陽万物と生ぜ謂也詩序云  
 唯后妃徳也風之始也所以風化天下而正夫婦善故用之郷人享用之那人善といふはうとせらるる  
 〇流通分は題名とありて常途の巻也今物語も終の巻と夢浮橋と号と別而二巻の名物而  
 一部の名物とていふは光源氏物語といふも或夢浮橋物語才三十七法の序といふも且物語  
 と光源氏と名つを巻の教と三十七帖とていふも心城の三十七尊の光とていふも且物語  
 師説如此又以愚案加潤色耳但再三案之真實夢の一字外は別乃心と浮橋は夢といふは  
 来りる詞也凡當流のまじりやとていふも正説とていふは本哥の世中夢のまじりやとていふは  
 〇河才舟七此物語の巻々各相垂り手習はつちまへ或詞の字とて名つを或哥の心を以て早うせり



○しつぎんち 或抄 僧都の馳走一節也

○このまじり 或抄 芝の匂也  
河小野徑 此處 花仙窟

○ちりぢり 細 僧都の返答

○しやまもろ 細 世の常のうらみをたづねていふこと

○くら尼 或抄 朽危 古き心也 又愚癡ハ不用之

○あまごころくし 弄 ころくしと云 極むす 又山近  
くせむせんとの句也

○このめしころく 弄 夕霧のうらみは野の邊に  
んゆそのなまてい入し多くせんとしや 芝の匂

○いんちんちん 孟 是より 芝の匂也

○この山里 孟 芝の匂は人の心をわすれし

○しつぎんち 或抄 ころくしと云 極むす 又山近  
くせむせんとの句也

あまごころくし  
くら尼  
しやまもろ  
ちりぢり  
このまじり  
このめしころく  
いんちんちん  
この山里  
しつぎんち

あまごころくし  
くら尼  
しやまもろ  
ちりぢり  
このまじり  
このめしころく  
いんちんちん  
この山里  
しつぎんち

○ 何 愧 因

○ 細 葉 の とうろく 花 鳥 の 本 り とうろく 心 恨 じ 也

○ 万 水 僧 都 の 心 也 手 習 也

○ 孟 僧 都 の 我 身 也 勤 勞 也 尼 也

○ 孟 僧 都 の 返 答 也 思 考 也

○ 孟 是 僧 都 の 返 答 也

○ 孟 野 也 是 手 習 君 の 野 也 始 終 也

Handwritten marginal note on the left side of the page.

Handwritten text in the right column of the page, consisting of approximately 15 lines of cursive script.

Handwritten text in the left column of the page, consisting of approximately 15 lines of cursive script.







○世老くもの或按 尼君のうらみ

○世老くもの或按 尼君のうらみ

○世老くもの或按 尼君のうらみ

○世老くもの或按 尼君のうらみ

○世老くもの或按 尼君のうらみ

○世老くもの或按 尼君のうらみ

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the text above.

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the text above.





○三條の言 細 世三宮也

○位より下 弁官位ありて殺心のなき

○今ハテハ凡そ 或抄 兼と云ふ所の好人

○うらまひて 細 兼也

○つんえん人言 或抄 兼といふ

○又云ふ 今上世三宮と兼とありて

○又云ふ 今上世三宮と兼とありて

ひあー 源人んえんんー 兼  
こまのぞのぞらそし 今兼  
すんすらんいしわやんいんま  
かりしとわおかふとらざい  
ゆま三葉のそらろくろが  
まそあのかげあのかひんじ  
まふおかかふろがらろくろ  
ごまおはじゆてさづらひゆ  
つらかまおのづらろくろあ  
りかともたろくろあら  
もろろろろろろろろろろ  
おろろろろろろろろろろ

ひあー 源人んえんんー 兼  
こまのぞのぞらそし 今兼  
すんすらんいしわやんいんま  
かりしとわおかふとらざい  
ゆま三葉のそらろくろが  
まそあのかげあのかひんじ  
まふおかかふろがらろくろ  
ごまおはじゆてさづらひゆ  
つらかまおのづらろくろあ  
りかともたろくろあら  
もろろろろろろろろろろ  
おろろろろろろろろろろ





つと世とて 細江舟の心也 かつつきよ 隨身の  
名もそれとていひあやせられし也

○うろちり 井守治へうちのあやせし也

○よ川よよ 細江の心也  
孟横川へうちのあやせし也

つと世とて 細江舟の心也 かつつきよ 隨身の  
名もそれとていひあやせられし也

○又の月とてよ 巴按例のまはらう也

○三三人ハウ 巴按 幼うえり 童よまそ也

○よいよせおて 細江の守れ子也

○あにうせり 何吾子 日本紀 廿とわはひ  
とて男と兄とていひ也 或按 昔の初

○いといとて 孟海舟の在世とて君よまの心也

つと世とて 細江舟の心也 かつつきよ 隨身の  
名もそれとていひあやせられし也























○今更いじ巴城今よりは遠くはるかにありては  
しるす事なきなり

○いづれもいふも孟あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり

○いづれもいふも孟あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり

いづれもいふも孟あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり

○いづれもいふも孟あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり

○いづれもいふも孟あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり

○雲のうつろは花古今あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり

○人まれとやいふ巴城小君の心也

いづれもいふも孟あつゝの響を應せりては  
か君のいふことなり



正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日  
正徳九年六月廿七日

寛永十七年六月中旬洛北山下 一筆斎

寛文十三歲二月吉辰

雒陽西御門前

書林 積徳堂梓行

